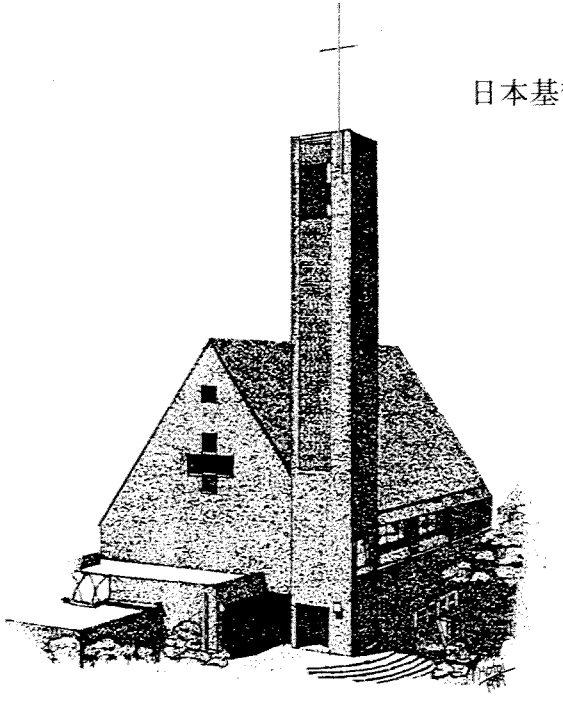
チャペル　ブックレット　No.5

―― 1990　秋の宗教講演記録 ――

生きることの感動

日本基督教団 豊島岡教会牧師
金　　纓



名古屋学院大学　宗教部

金　　纓　牧師のご紹介

キム・ヨン牧師は、１９４８年韓国・釜山にお生れになり、ソウル延世大学神学部を卒業されました。同大学の大学院に留学していた日本人の澤　正彦牧師と出会って結婚。夫婦で「日韓の架け橋」となりたいと願って渡日。東京神学大学大学院を修了後、日本基督教団小岩教会の牧師に就任されました。

その後、世界教会協議会（ＷＣＣ）の女性神学のスタッフとしてスイス、アメリカ、メキシコなどで活躍。現在は、日本基督教団豊島岡教会の牧師をしておられます。著書に「チマ・チョゴリの日本人」「チマ・チョゴリのクリスチャン」「メキシコわが出会い」「弱き時にこそ－癌を告知された夫婦の日記」などがあります。

１９９０年１１月１９日、宗教部主催の秋の宗教講演会でお話いただきました。

生きることの感動

金　　纓（キム・ヨン）

私はよく人から「あなたはいつも楽しそうですね」といわれます。事実、私のまわりには楽しいことがいくらでもありますし、生きることは感動の連続です。あまり楽しそうですから、人は私のことを恵まれた環境に育ち、苦労も困難も知らないで、ただただ楽しく生活してきたと思っているようです。

ここで少しその誤解を解くためにも、まず自己紹介をさせていただきましょう。また、さきほど私を紹介してくださったなかに、大きな間違いがあるからです。

まず訂正しなければならない大きな間違いとは、私は「日韓のかけ橋」になろうと思ったことは一度もないし、今も思っていないということです。

私は日本が嫌いです

確かに私の亡くなった夫、沢　正彦は「日韓のかけ橋」を志していました。しかし、私は違います。誤解を恐れずに言えば、私は日本が嫌いなのです。

私は韓国に生まれ、小さいときからずっと「日本は敵だ」という反日教育を受けて大きくなりました。この教育のために「世の中で

一番嫌いなのは日本人」と思っている韓国人はいっぱいいます。私もそんな一人でした。

そんな私がまさか日本人と結婚するなんて自分でもびっくりしましたし、ましてや日本の教会の牧師になるなんて夢にも思いませんでした。

沢　正彦とは私が勉強していました韓国の延世大学で出会いました。彼が延世大学に留学していたのです。結婚するときは誰でも相手の人柄を見ますね。私は彼の人柄には文句がなかったのですが、当然のことながら「国柄」に文句があって迷いました。

けれども結婚することになって、私はその結婚に「日本に住むのはイヤですよ」という条件をつけました。彼は「ボクは韓国が好きだ。韓国に骨をうずめるつもりだ」と言ったのです。

しかし彼が牧師になったとき、どうしても三年間だけは「牧師見習い」をしなくてはいけないというので、三年間だけという約束で二人で日本にきて川崎に住みました。今考えますと、そもそもあれが間違いの始まりだったかしらと思っています。

とにかくその時は無事、韓国に帰り、彼は日本キリスト教団の宣教師として韓国神学大学で教えていました。

ところが1979年の10月に彼の説教が問題になって、国外追放、つまり韓国を追い出されてしまったのです。そしてあんなにイヤだった日本に住むことになったのです。

その間、私も牧師になっていました。韓国人の牧師がめずらしいからでしょうか、私は日本中のいろいろなところに招かれてお話しさせていただきました。また私の旅行好きもあるのでしょう、四年間でほとんど日本中、鳥取県を除いてあと全部の都道府県に行きました。そして今年ついに鳥取県にも行きました。

「住めば都」ということわざが日本にあることを知っています。四年間住んでみて、それでもなお私は日本が好きになれませんでした。日本で一生暮らさなければならないと思うだけで病気になりそうでした。

そのうちほんとうに病気になったりしましたが、1986年、私たち家族は日本を離れ、アメリカに行きました。それから一年ほどで家族は日本に帰り、私はスイスのジュネーブにある世界教会協議会のスタッフとして単身赴任しました。

ところが夫である沢が病気になりましたので、私も日本に帰ってきたのです。

日韓のかけ橋

確かに沢は「日韓のかけ橋」を志していました。彼は日本と韓国の間の歴史を研究していましたが、あるとき「私はイエス・キリストの十字架が玄界灘に立っているのを見た」と言ったことがあります。日本と韓国はこんなに近いのに、不幸な歴史のために、お互い

に良い関係を保てなくなりました。この憎しみ、争いがあるある所に、イエス・キリストが和解を呼びかけているとするなら、今その十字架は日本と韓国の間、玄界灘に立っているのだというのです。あの十字架＝クロスが玄界灘に立っているなら、彼は渡らなければならない＝クロスしなければならないと考えたのです。

そしてそう考えていた沢は亡くなりました。私はもともと日本が好きではありませんでしたから、夫が亡くなった今、日本にいなければならない理由はありません。子どもを二人連れて、嫌いな国で苦労するより、韓国に帰るなり、私の好きなメキシコにいくなりすればよかったのです。実際、以前のままスイスで仕事を続けることもできましたし、アメリカの韓国人教会の牧師になるという道もありました。

しかし私は日本に居すわっています。その理由は、今私が牧師をしている豊島岡教会との出会いが、少しづつではありますが、私を変えていったのです。もちろん完全に変えられたわけではありませんが、その出会いがもう少しだけ、もう少しだけ、日本に居ようという決心をさせたのです。

自分の一番したいこと

こんな私なのですが、みなさんは私を「恵まれた人」とか「運のよい人」とか言って、

羨ましがります。確かに私はみなさんが言う苦労を苦労とは思いませんし、いつもとても楽しそうに見えるらしいし、元気があるように見えるらしいのです。

なぜ、楽しそうなのでしょう。なぜ、元気そうなのでしょう。それは「私は私の一番好きなことを、自分で決めてしているから」です。

私は小さい時からずっと牧師になりたいと思っていました。そしてそれがかなえられて牧師になりました。牧師として説教すること、また苦労して説教の準備をすることが大好きなのです。

さきほど言いましたように、夫が亡くなった時、私は私の歩いていく道を決めなければなりませんでした。豊島岡教会のみなさんが「先生といっしょにやっていきたい。どうぞここに残ってください」というのを聞いて、私はスイスに戻って仕事をすることも、アメリカに行って牧師になることもやめて、豊島岡教会の牧師のままでいることを選んだのです。決心したのです。

私は今、大好きな豊島岡教会の牧師をすることができ、毎日曜日説教ができるのですから、これ以上の幸せはありません。そう思っているから、人から楽しそうに、元気そうに、幸せそうに見られるのです。

無駄な我慢はしない

普通のお母さんは子どものためによく「我慢」をします。自分は我慢しても美味しいものを子どもに食べさせるとか、朝、眠いけれど早く起きてお弁当をつくるとかです。私はしません。子どもといっしょに美味しいものを食べることはあっても、食べたいけれど我慢して自分の分は子どもに、というようなことはしません。

また私の家では必要な時は、子どもは自分で朝早く起きてお弁当をつくります。この頃では私が山歩きに行くと言うと、私の分のお弁当まで作ってくれます。私は「ありがとう」と感謝して持っていきます。

私は教会の牧師としても「我慢」はしません。教会の人たちに「私のところに悩みごとなんかもってこないで」と言ってあります。悩みが一番多いのは私なのですからね。ほんとうは悩みを聞いてもらいたいのは私の方なのです。教会は悩みを聞いてもらう所ではありませんし、わがままを言いにくる所でもありません。

こんな私ですが、私の子どもたちはほんとうに自慢できる子どもに育ちましたし、豊島岡教会は若い人を中心にどんどん教勢は伸びて、今、新しい教会堂を建てようとしています。

みなさん、人間は人のために我慢しきれるものではありません。人のためだけに生きれるものではありません。私は遠慮しないで自分のために生きればいいと思うのです。自分

を抑えて、我慢して、無理をして、つらい思いをしているより、自分の生きたいように生きてハッピーな顔をしていたほうがいいのです。

みなさんは子どもの立場ですから、こう考えてみてください。もしお母さんがあなたのために犠牲になっていると分かったら、あなたはそれを負担に感じませんか？　そのために暗い顔をしていられたら、家庭全体が暗くなるでしょう。明るい元気なお母さんがいいのです。

教会もそうです。豊島岡教会に集まってくる人々が「私たちの牧師は世界一、幸せなのですって」といって笑っていますが、それで自分たちも幸せなのです。

人のために役立つということは、それ自身悪いことではないでしょう。特に日本人はその傾向が強いと思いますが、自分がハッピーになるよりは自分を犠牲にしてでも、人のために働こうとしています。真剣な人であればあるほどそうです。教会の中やクリスチャンに多いタイプです。そういう人はじっと我慢をして、下を向いて生きているから、そこには感動がないのです。暗いのです。

感動の素直な表現

また少しくらいの感動があってもそれを表現するのは恥ずかしいと思うのでしょうか、抑制しているようです。もっと素直に表現し

てはどうでしょうか。そうすれば感動が倍増するのですよ。

私は山が好きでよく出かけるのですが、山を歩いていれば、道端の草も花も、空の雲も、それはもう感動の連続です。そうすると私はそれをいちいち口に出して言うのですが、他の人はそんなにも言いません。どうして感動しないのかしら、と思って聞いてみると「ちゃんと感動しているよ、ただあなたのようには表現しないだけだよ」と言います。特に男性は表現が下手です。

明るくハッピーに

でもそれだけでしょうか。顔を見てもとても感動している顔には見えませんね。

世界の人々が日本に来たとき、日本人を見て、最初の印象は何だと思いますか？「日本人は暗い」ですよ。私は世界中35か国に行ったことがありますし、５つの国で暮らしました。そんな経験から見て、やはり私もそう思います。日本人は暗い感じがします。疲れていて不安で無表情です。朝一番の新幹線に乗ってごらんなさい。みんな朝から疲れきって眠っています。

今や日本は世界の羨望の的です。私が東京に住んでいるというと皆がほんとうに羨ましがります。便利で安全で、それに何より豊かですもの、不法入国をしてでも日本に来たがるのです。そんな日本なのですから、日本人

はもっとハッピーな顔をしていてもいいはずなのです。

私はある時、それはメキシコから帰ってきてすぐだったのですが、日本人があまりに忙しそうなのである人に「どうしてそんなに忙しいの？」と聞いたことがあります。すると「こうしないと食べていけないからです」という答えが返ってきました。私はびっくりしました。「食べていく」ということは、文字通り「食べていく」ことではないのですね。ラテン・アメリカやアフリカのある国々と日本では「食べていく」と言うことの意味が違うのです。

ラテン・アメリカのある国でのことです。そこではよほどの所でないと時計がありません。ある時私が「それではどうやってご飯の時間を知るのですか？おなかが空いたら食べるのですか？」とききました。私はのんびりと時計にしばられない生活が羨ましいと思ったのです。するとどうでしょう。答えは「いいえ、おなかがすいた時でなく、そこに食べ物がある時に食べるのです。それが食事の時なのです」というものでした。

日本人の言う「食べていけない」という言葉とは大きな違いがあるのです。

生きていく目標

日本人はなぜ暗いか、無表情かというひとつの答えは、生きていく目標がないというこ

とではないでしょうか。

あなたがた学生には、何のために大学で勉強しているのですか、という質問をしたいと思います。たくさんの人が大学に行くから、大学を出た方がよい職業につけるからと言われているのでしょう。

またどうしてこの大学に入学したのですかという質問をしたいと思います。入学試験の時、ちょうど学力が見合っていたという人が多いでしょう。家が近いからという人もいるでしょう。またキリスト教主義大学だからという理由の人も一人くらいはいるかもしれません。

私の子どもが大学を受験するときのことです。彼女はアメリカから帰ってきたのですから英語がよくできるのは当然でした。それで上智大学にするというのです。私は日本の大学のことは何も分かりませんから「上智大学に行って何を勉強するの？」と聞きました。彼女は「分からないけれど、高校の先生から英語がうまいから上智がいいと言われたの」と言うではありませんか。私はびっくりしてすぐに「そんな考え方で大学に行くのなら、大学に行くことはやめなさい！」としかりました。

どういう人生を歩みたいかということによって、そのためにはどんな勉強をしなくてはならないから、どの先生の講義を聴きたいからどの大学に行くとか、どの学部がいいとか決められるべきでしょう。その考えがひとつ

もないなら大学を決めることはできないはずですし、大学にいくこと自体、必要ないはずです。

娘は「ママ、今の日本の高校生で自分の人生についてそんなふうに考えている人はほとんどいないのよ。みんな偏差値で決まるんだから」と言いました。

私は断固として「そんな考えなら大学にいくのをやめなさい」と言いました。彼女はよく考えた末、自分が一番したいと思っていた音楽の学校にいきました。

私の娘やあなたがたのように若い人々は、まだはっきりとした「生きていく目標」というようなものを持つことは難しいかもしれません。しかし今、何のためにこれをしているかということくらいは考えてほしいと思うのです。

目の前の目標だけでなく

私の友人のお父さんの話をしましょう。その方は年をとられて、老人性の痴呆症になられました。そして「旨いものが食べたい」とおっしゃったそうです。そこでまわりの人たちが、お父さんの好物のメロンやお菓子をさしあげても、「これじゃない」とおっしゃいます。「じゃあ何が食べたいの？」とお聞きしても「旨いもの」としかおっしゃらなかったそうです。「旨いもの」が食べたいのだけれども、彼にはそれが何なのか分からないの

です。

それと同じように私たちは幸せな人生を歩きたいのです。意味のある人生を目標にしているのです。けれどもどういう人生が幸せなのか、どういう人生が意味があるのか、それが分からないのです。

ですから、とにかく目の前にことだけにいっしょうけんめいになるのです。とにかくどこでもいいから大学に入り、適当に勉強をして、単位をそろえて卒業し、お金をいっぱいくれそうなところに就職して、男の人なら早くお嫁さんを見つけて……。これは特に大変ですよ、今まで男性がしてきたことがたたって、しっかりしている女性は「結婚しない」と決めている人が多いのですよ。

ちょっと余談ですが、結婚しなくても生きていける、しっかり自立した人は早く結婚相手が見つかり、一人では生きていけない人はなかなか結婚できないものなのです。

これもまたちょっと冗談ですが、日本は食料の自給自足ができないだけじゃなくて、この頃はお嫁さんの自給自足もできないで、韓国や台湾、またタイ、フィリピン、スリランカとあんなに遠くまで行って、お嫁さんを連れてくるのです。そしていろいろな問題をおこしています。困ったものです。

個人も国家も同じことです。いいえそういう個人が集まって、こういう国家をつくっているのかもしれません。

日本は世界中から、特に発展途上の国々から羨望のまなざしで見られています。便利だとか安全だとかもその理由でしょうが、その第一の理由はお金がある、というだけのことです。日本は第二次世界大戦が終わった後、みんなでがんばって、経済、経済、と励んだのはよかったのですが、何のために豊かになりたいのかという目標がなくて、ただお金持ちになるということだけが当面の目標だったため、こんなことになったのではないでしょうか。

私たちは目の前にあることだけにとらわれないで、幸せな人生、意味のある人生、それはどんなものなのかを真剣に問わなければなりません。

人との出会い

どうして意味のある人生をめざさなければならないか、どうやって感動的な生き方を見つけなければならないか、根本的な話をしてきましたが、若いみなさんには、じゃあどうしたらいいのか、という HOW TO をお話しなくてはなりません。

生きることの喜びのひとつは、また言いかえれば、感動をあたえられることの大きなひとつは、「人と出会う」ことです。いくら出会っても飽きることがありません。もちろん時には煩わしいこともあります。イヤなひともいます。それもふくめてやはり人との出会いは喜びです。

私の人生で今までほんとうに多くの人と出会ってきました。苦しいときも人と出会うことをほんとうに喜びと感じてきました。

本や思想との出会いは、自分の自由になるところがあります。たとえば本は読みたいときに読みたいところを読めばいいのです。読んでいておもしろくなくなれば、読むのをやめても、本は文句を言いませんし、それでこちらも良心の呵責を感じることもあまりないでしょう。

けれども人間とのつきあいはそうはいきません。最初はよくても、長くつきあっていけば「叩けば埃がでる」のたとえのように、人はだれでも欠点をもっているものですから、それが見えてきます。だからといって「はい、さようなら」というわけにはいきません。また欠点の少ない人でも、こちらが要求する分だけ返ってくるとはかぎりません。そんなときはギクシャクした関係になるでしょう。

そんなふうに人との出会いは、良いことばかりではありません。それが分かっているから、なるべく多くの人と深くはつきあわないようにしていると言った人がいます。

日本人のなかには、限られたなかであたりさわりのない人々と、なるべく浅くつきあうようにしているという人が多いのではないでしょうか。

でもそれではまるでかわいいお人形と遊んでいるようです。お人形でなくて人間の子どもならば、こちらの都合などおかまいなしに

泣くし、世話をするのも大変です。病気をすることもあるし、お金もかかります。でもどんなに大変でも、しんどくてもお人形で遊ぶより、人間の赤ちゃんを育てる方がずっとずっと楽しいのです。そこにはほんとうの喜びがあります。

いつかＴＶゲームがはやりましたね。私などやり始めたらけっこう熱中するのではないかとも思いましたが、あれも結局、相手は機械です。ＴＶゲームに夢中になっている人の背中をみて、何だか淋しい気がしました。

生きることの喜びは、命あるもの、生きているものに接して、おたがいに苦しみも悲しみも含めて、そこで感じあうもののなかにあるのです。そしておたがいに豊かにされていくのです。命のないものには感動はありません。

ある老人との出会い

ここで私が経験したほんとうにすばらしい出会いをお話ししましょう。

あるとき私は老人ホームを訪ねました。それは89才になられるある婦人をお見舞いするためでした。その方も老人性痴呆症で、もの忘れがひどく、最近５年ほどは会った人は誰も覚えていないというのです。彼女の娘さんから「次にお見舞いくださったとき、母から『どなたですか』と言われても、がっかりしないでください」と言われました。その時は

彼女といっしょに聖書を読み讃美歌を歌って礼拝をして帰りました。それから１カ月ほどたって、彼女の容体がたいへん悪いというので、聖餐式をするために彼女が移されていた病院に急ぎました。

私がベッドのそばに行くと、ここ一週間は何も喉を通らず、点滴だけの彼女が私をじーっと見つめるのです。そうですね、時間にして１分間くらいでしょうか、見つめ続けました。そして大きな声ではっきりと「ヨン先生…」と言ったのです。１カ月前にたった一度会っただけの私を覚えていてくれたのです。私は嬉しくて嬉しくて彼女の手を握りしめました。彼女はまるで赤ちゃんがそのお母さんの顔を見て安心するようににっこり笑いました。

それから間もなく彼女は亡くなりました。お葬式もすっかり終わった頃、私はある事に気がつきました。私はそれまで、先に亡くなった夫を含めて、日本人とつきあうときは、いつも日本人であることを意識してきあっていました。ところが彼女は違っていました。彼女が日本人であるとか、外国人であるとか１度も考えたことがないことに気がついたのです。彼女にはそんな力があったのです。

私はそのとき夫である沢を亡くして、これからどうしようかと考え、迷っていた頃だったのです。そんな私に彼女が「ヨン先生…」と呼んでくれた声、またにっこりわらいかけてくれた顔、それがまるで迷っている私の背

中を押すようでした。「もう少し、日本にいてください」とでもいうように。

こうして出会った人々は私の財産のようなものです。私は世界中に友人という多くの、また大きな財産を持っています。

ほんとうの自由

新約聖書のヨハネによる福音書８章に「真理はあなたがたに自由を得させるであろう」という言葉があります。これは私の母校、延世大学の校訓でもあります。この「自由」、ほんとうの自由について考えてみましょう。

人が私に「なぜ、キリストを信じているのか」と聞きます。その答えは「私はキリストに出会って自由にされたから」です。キリストは聖書で「私は道であり、真理であり、命である」と言われました。そのキリストに出会ってほんとうに自由にされたからです。

人がまた「なぜ、牧師になったのか」と聞きます。その答えは「ほんとうの自由というものはキリストによらなければならないということを、人々に証ししなければならないから」です。ですから私はキリストを信じていますし、牧師であるのです。

それではなぜ、真理が私たちに自由を得させるのでしょうか。真理とは何でしょうか。真理とは神の真実です。それがイエス・キリストを通してあらわされたというのがキリスト教です。神の真実が、神の愛があの十字架

にかかって惨めに死なれたイエス・キリストを通して表されたというのです。

十字架上でイエス・キリストは惨めで、恥ずかしくて、痛々しい姿になってくださいました。それは私たちのためなのです。ほかでもない、私のためなのです。世の中のすべての惨めさ、恥ずかしさ、痛々しさをひとりで引き受けてくださったのです。

それを思えば私たちはもうどんなことでも受けて立てます。どんなに落ちぶれた、挫折した、絶望の淵に立たされた人のためにも、その人をそこから自由にするために、救うために十字架はあんなにも惨めに、恥ずかしく、痛々しく、立っているのです。それが私を自由にさせる大きな力として私のなかに働いているのです。

信仰による明るさ

私はあの十字架に支えられていますから、人間的な苦しみは平気です。むしろ苦しみは聖書にあるように、希望への道であるように思います。十字架に近づく道でしょう。

人が私を見て明るいとか、元気があるとか、また感動するものがあるとか言ってくださるとすれば、それはこの信仰があるからです。

それは決して私の力によるものではなく、どんなときにも、イエス・キリストの十字架に、愛に支えられている、任せているという信頼、信仰です。

私はイエス・キリストに出会って自由にされました。あなたがたも自由になってください。そして自由になって、人に感動をあたえてください。

この経済的な豊かさのなかで、幸せな生き方を問い、意味のある生き方を問うために、いま一度聖書を読んでいただきたいと思っています。

（キム・ヨン　日本キリスト教団　豊島岡教会牧師　1990.11.19. 宗教講演）

1990 秋の宗教講演会ご案内

生きることの感動

と　き　**11月19日(月)**　午後2時～3時

ところ　名古屋学院大学 チャペル

講　師　日本キリスト教団 豊島岡教会

金(キム)　櫻(ヨン)　牧師

講師のキム・ヨン牧師は、1948年、韓国・釜山にお生れになり、ソウル延世大学神学部を卒業されました。同大学大学院に留学中の澤正彦牧師と結婚され、夫婦で「日韓の架け橋」となりたいと願って渡日され、東京神学大学大学院を修了後、日本キリスト教団小岩教会の牧師に就任されました。

その後、世界教会協議会（WCC）の女性神学スタッフとして活躍、現在は日本キリスト教団豊島岡教会の牧師をしておられます。著書に、「チマ・チョゴリの日本人」「チマ・チョゴリのクリスチャン」「メキシコわが出会い」「弱き時にこそ ── 癌を告知された夫婦の日記」などがあります。

主催　名古屋学院大学 宗教部
TEL. 0561－42－0348

チャペル　ブックレット　発刊にあたって

本学の開学（1964年）以来、宗教部では毎年、春と秋に「宗教週間」を設けて、折りにかなったテーマと講師を与えられて、学生諸君と共に学んでまいりました。

その講演内容は、宗教部の機関紙「麦粒」に掲載してまいりましたが、貴重な講演を、いつでも手にとって読める形にまとめてはどうかとの提案を受けて「チャペル　ブックレット」として発刊することにいたしました。

このチャペルブックレットが、本学の学生諸君をはじめ、多くの方々に刺激を与え、問題を提起し、より深い認識と行動へかりたてるきっかけになることを願っています。

1989年11月

宗教部長　梶　原　　寿

チャペルブックレット№5

１９９２年３月２５日発行

編集・発行　名古屋学院大学　宗教部
〒４８０－１２
瀬戸市上品野町１３５０
TEL０５６１－４２－０３４８

印　　刷　泰光株式会社

チャペルブックレット

●既刊

No. 1　経済の論理と人間の論理
　エコノミック　アニマル日本
　　恵泉女学園大学教授　　塩沢　美代子

No. 2　心を問い続けて
　北海道家庭学校校長　　谷　昌　恒

No. 3　国際化時代におけるキリスト教の使命
　韓国の視点から
　　梨花女子大学教授　　徐　洸　善

No. 4　激動する現代史と神のみことば
　東京女子大学教授　　池　明　観

No. 5　生きることの感動
　豊島岡教会牧師　　金　纓